

■第2回 議事要旨

日 時：令和6年7月11日（木） 13：30～16：00

場 所：長与町立高田中学校図書室

出席者：委員9名、オブザーバー4名、事務局3名 （※長崎新聞社取材）

1 教育長より

前回の検討委員会の後、大阪府池田市の義務教育学校「ほそごう学園」の視察を行い、検討委員会で挙げた疑問点について校長先生に尋ねたところ、参考となる回答や取組等を伺うことができたので紹介したい。視察後、新たな学びの場として、本町においても義務教育学校を実現したいという思いを強くした。

2 前回（第1回検討委員会）の振り返り（参考資料：P3～P9）

<事務局より>

- 教育長からの諮問内容
- 令和の日本型学校教育とは
- 義務教育学校とは、義務教育学校のメリット・デメリット
- 前回の疑問点や今回の検討事項 等

3 協議内容

（1）小学校と中学校に分かれている現状から

- 中1ギャップや登校渋りの増加については、様々な要因があると思うが、高田小の子供たちは、そのほとんどが高田中に進学するので、人間関係にあまり変化はない。しかし、小学校から中学校という校種が変わることで、自分の中に壁を作っているように感じる。小学校と中学校が切れ目なく繋がっていくのであれば、その壁はなくなるのではないかと考える。
- 中1については、4月は頑張る姿をたくさん目にすることができ、問題も起こらないが、ゴールデンウィークが過ぎ、体育大会等の行事を終えた頃から生徒のトラブルや困り感が見られるようになる。現在、高田中と高田小の通級指導教室の担当は小学校教員が兼務しているが、小学校の頃の様子を知っていることが強みであり、生徒の気持ちを上手に引き出せている。小学校の頃の様子をよく分かっている教員の存在は生徒の安心感に繋がる。
- 中学生になると、友達とどう会話していいか分からなくなることがあるようである。多くの人が一定の人としか話さなくなるようで、中学校に上がると急にそうなるようである。

- 教育に力を入れている保護者が多く、子供たちの多くはその期待を背負っている中で、中学校に行くことがプレッシャーになっているのではないだろうか。それを軽減するためにも顔見知りの人がいることはとても大事だと思う。小学校でお世話になった先生方と再び出会ったり、再び教えてもらったりする機会があることは安心感がある。また、中学生になると親の介入が難しくなるので、顔見知りの友達が多くいることはとてもよいと思う。

(2) ファーストステージにおける高学年の不在 ～残される低・中学年～

- 小学校は、リーダーの6年生が引っ張っていくというのが当たり前であったが、4年生の段階でこれまでの6年生の立場のようなことができるのか。子ども会活動も6年生がリーダーだが、4年生にそれができるのか心配である。
- 4年生がリーダーになれるかという質問について、私も同様な思いをもっていたので、「ほそごう学園」の校長に直接質問をぶつけたところ、4年生にも十分できるとの回答であった。これまで小学校において、あまり光が当たっていなかった中学年の4年生がリーダーとしての役割を与えられることにより、大きな成長が見られるとのことである。
- 4年生にどこまでを求めるかではないでしょうか。幼稚園や保育園の先生方がよく言われるのが、年長児は園のリーダーとして年少児のお世話もできるのに、小学校に入ると一番下になることで、今までできていたことができなくなるといことである。どこまでを求めるかが重要で、その環境や立場でできることが変わってくると思う。
- 今、1年生から4年生までの話が出ているが、その手前の幼稚園から小学校に入る段階で、1年生からリーダーの場を剥奪しているとも言える。義務教育学校の年少段階においても、リーダーとして活躍する場が増えることで面白いことが起こり、今まで見えなかったことが見えてくる。逆に、5・6年生の活躍の場が奪われないようにしないといけない。学年という点ではなく、9年間といった線で見ると必要がある。

(3) 義務教育学校の柔軟性や自由度について

- 義務教育は、小学校と中学校を分けずに一体的に行うのがよいと思う。その一番大きなメリットが教育課程である。小学校では緩やかな学習スピードが、中学校では消化する内容や覚えられないといけなくなること増えることで速くなる。子供たちがつまづかないように、教育課程を前倒しするなどして変化を緩やかにし、子供たちの負担感を平準化できる。

- また、教育方法としても教科担任制、小学校でも一部行われているが、免許の関係もあり、義務教育学校の方が柔軟に対応できる。義務教育は9年ひとまとまりと考え、無理に4-3-2制などに分ける必要はない。リーダーについては、ある集団の一番上は自ずとリーダーになる。それぞれの学年に対して行事ごとにリーダーの役割を与えてみてはどうだろう。一気に9年間を一体型でできればいいが、1年～4年の教育課程はもうひと工夫が必要だろう。
- どうせやるのであれば新しいことをやったほうがいい。義務教育学校には、そのための自由度があり、自由度が増すことでよい授業にも繋がるのではないか。

(4) 施設の在り方 ～施設分離型から将来的には施設一体型へ～

- 当面は、4年生までを高田小、5年生以降を高田中と想定している。高田南の土地区画整備事業により、新たな住民、子育て世帯が入ってくることで、一時的に学級が増えることも想定される。令和7年度の高田小の新1年生は73名、大規模校の長与小とあまり変わらない数となっている。仮に、高田小が学年3クラスずつになった場合、高田小の校舎に児童が収まらない状態が生じる。高田小の建替えは難しいので、高田中に建増しをして、将来的には同じ敷地内の施設一体型をと考えている。
- 当面の期間を現段階で詳細に示すのは難しいが、早くても向こう10年は見ておく必要があると考える。また、大規模な増築は過大な投資になる場合があり、現段階では8教室程度の増築が妥当だと考えている。
- 施設一体型となれば、校舎が離れているという物理的なデメリットはなくなるが、すぐにはできない。しかし、分離型だとしても教育課程の自由度や柔軟性が高まるのであればやらない手はない。

(5) 義務教育学校の意義や可能性（参考資料：P10～P24）

<事務局より>

- 義務教育学校の意義
 - ・生徒指導上のメリット、学習指導上のメリット、教育課程の概要
- 義務教育学校の学校生活（例）
 - ・入学式、卒業式、始業式・終業式等、運動会、修学旅行、宿泊学習
- 高田地区の児童生徒数の増加（推計）
- 高田地区の義務教育学校の可能性

- 義務教育学校では、9年間の義務教育を切れ目なく一貫して行う。それにより、児童生徒の安心安全、保護者の安心、教師の深い子ども理解といった生徒指導上のメリットが挙げられる。子供たちにとって、顔見知りの教員や仲間との学びや、異学年交流、そして目標となる9年生の存在は、児童生徒の安心安全に繋がると考える。保護者にとっても同様で、顔見知りの保護者や児童生徒、教員の存在は安心感に繋がる。教師にとっても顔見知りの児童生徒の理解は深まり、より適切な指導・支援に繋がると考える。
- また、5・6年生の授業への中学校教員の乗り入れや、7年生の授業への小学校教員の乗り入れが可能になるなどの学習指導上のメリットが挙げられる。技能教科をはじめとする専門性の高い教員による一部教科担任制や、数学等のつまずきが出やすい教科において顔見知りの小学校教員からの個別指導は、児童生徒の学習意欲を大いに高めると考える。
- 教育課程については、9年間の系統性を確保して編制・実施し、段階的に教科担任制を仕組んでいく。9年間の指導を一貫的に行うことは、環境変化に配慮が必要な児童生徒が多く在籍する特別支援学級の教育活動においても効果があると考ええる。
- 義務教育学校の学校生活の具体的な場面について、「ほそごう学園」の例を交えながら説明する。入学式は、後期課程の1年生である7年生が参加し、新1年生の入学を祝う。卒業式は、9年生と在校生代表の7・8年生で実施する。始業式や終業式等は、全校児童生徒で実施する。開催方法については、施設分離型の場合はオンラインまたはハイブリッド型（オンライン＋集合型）で実施する。（その他、参考資料参照）
- 今後、一定期間、高田地区の児童生徒数の増加が推測され、何も手を講じなければ高田小の教室が不足する事態に陥る。高田地区の児童生徒数の増加への対策は急務である。高田小と高田中の歴史と伝統、校風を活かし、革新のための新風を吹き込む義務教育学校は、拡大する高田地区の新旧住民の絆づくり、新たなコミュニティづくりの核になり得るとともに、子供たちが、夢を描き、夢に向かい、夢を叶える場となり得ると考える。
- 昨年度末に高田中の入学説明会に参加した子供たちからは、高田中への憧れや入学を楽しみにする声が数多く聞かれた。もちろん、教科担任制など、小学校との違いに不安を感じる子供たちもいた。義務教育学校ができれば、行き来が柔軟にできるようになり、上級生への憧れなど、いろいろな効果があると考ええる。

- 小中を一体にしたらメリットもあるが不安もある。分からないものへの不安はこれまでの当たり前があるからで、創るところから携われれば不安も軽減するのではないだろうか。分からないこと、やったことがないこと、わが子へのメリット、将来的には一体型など、変革期だからこそこうしてほしいという要望を出しやすいのではないかと考えると期待は大きい。
- 高田地区は、昔から地域住民同士の絆づくりに取り組み、コミュニティとしての力は優れている。新しい時代を迎えて、義務教育学校の9年間で子供も大人も顔見知りが増え、そこに新たな絆ができることは大変素晴らしいと思う。これで町内にいてもらえればいいのだが、大学や就職で一度離れるとなかなか帰ってこないことが気がりである。今月は祇園祭があり、今年は高田が当番で、若い人を見つけるのが大変である。人と人のつながりが深まるのであれば、初めてのことで心配する人もいるかと思うが、義務教育学校を進めていく方がいいのではないだろうか。
- 義務教育学校について、前回より具体的な姿を共有できたことで、地域の方や保護者の方から、どんなものができるのかという期待感を感じることができた。新しく創るのであれば、これまでにない新しいものができる。そこに期待感が生まれる。また、実際に創る場合、小・中学校の校長先生方は、いろいろと考えないといけないと思う。新しいものを一から創る面白さとともに、先生方の腕の見せ所にもなると思う。
- 地方の自治体の縮小化、元気がなくなる中で、学校教育が地域を活性化する。義務教育学校は、コミュニティづくりの核になると考える。新しい住民が入ってくるということは、若い子育て世代が地域に入ってくるということである。コミュニティづくりにおいて、最も携わりやすいのが学校であり、子供たちと共に大人も9年間コミュニティづくりに携わる機会となることから質の高い学校教育が期待できる。
- 学校教育の質には、学校教育目標の質、教育課程の質、教師の質、スクール・マネジメントの質がある。学校教育目標の質の面からは、子供たちに義務教育9年間でどんな資質能力を身に着けさせるのか、学校教育目標を学校・家庭・地域のみinnで考え創りたいものである。教育課程の質の面からは、義務教育学校では、教育課程の前倒しなどの自由度があり、様々な工夫が期待できる。事務局の説明の中で英語教育に関するコマニシャル的なメッセージがあったが、英語専科が必ずしも小学校の外国語科の指導を適切にできるものではないので検討が必要である。教師の質の面からは、義務教育学校にすることで、小中の壁がなくなり、小学校の教員が中学校の教員に学び、中学校の教員が小学

校の教員に学ぶ環境ができる。スクール・マネジメントの質の面からは、学年区分のマネジメントをはじめ、中学校での単元テストなど、これまでとは違う取組をみんなで考えることは楽しく、教員がワクワクするのではないかと考える。最後に、高島小中学校の経験を述べさせていただくと、小中の教員の融合によるよさやワクワクがたくさんあった。長与町の義務教育学校もワクワクするものであってほしい。

- 品川区は早い段階で義務教育学校を設立した。一体型も分離型もあり、新しい一体型の学校は豪華だったので子供を入学させたいという親がとても多かった。まず、カリキュラムを改善した。品川区独自の指導要領を教科ごとにチームを作り、1年間を費やして作成した。道徳科や特別活動を行わず、「市民科」という独自教科を作り、独自の教科書も作った。また、カリキュラムを小中一体にし、小1から英語、中2では琴の授業などを行った。琴は高価であるため、教育委員会で購入し、各校持ち回りでの実践的な活動とした。
- 長与町もせっかく新しいことをやるのだから、長与町でしかできない教育があるということをポイントにすればよいと思う。保護者や地域の声も必要だが、先生方が楽しく教育課程を創ることが重要である。学年区分については、4-3-2制や5-4制といった枠にとらわれなくてもよいと思う。また、例えば、9年生は運動会、8年生は文化祭など、学校行事等を全部、それぞれ学年に任せて好きにやらせてみてはどうだろう。すべての学年が主役、校則なし、制服なしなどの新しい取組も考えられる。
- 校則なし、制服なしは面白い。全くの白紙の状態から考え創るという点は、この検討委員会も同様で、ワクワク感が増した。今回は、前回以上にいろいろな意見が出され、義務教育学校をやってみようという前向きな意見が多くを占めていたように思う。次回、更に皆さんで考えていって新しい学校を創っていければと思う。